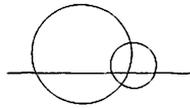


[講演会]



## 東亜同文書院大学記念センター 京都講演会 大陸にあった日本の高等教育機関と東亜同文書院

2010年7月17日 コープ・イン・京都

**【司会】** それでは時間になりましたので、ただいまから講演会をスタートさせていただきます。本日は京都の祇園祭の真っ最中。まあ最終日ではありますが、祇園のほうにも心を動かされることがあるかと思えますけれども、こちらの講演会にたくさんお集まりいただきまして、大変ありがとうございます。私は愛知大学東亜同文書院大学記念センター、センター長の藤田と申します。本日は私が進行役をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

なぜこんな祇園の時にやるかという話になるんですけど、京都で会場をいろいろ探す苦勞がございまして、そういう苦勞の中で、ちょうどこのコープ・イン・京都が空いてるということになりまして、これも奇跡に近かったんですけど、まあわれわれとしてはこの日にちを選ばせていただいたということでありまして。今日と明日、2日間にわたって京都の皆さん方にも、いろいろわれわれの展示を見ていただきたいと思っております。そしてもう1つ行事がございまして、明日の午前中には、お配りしたチラシにもあると思いますが荒尾精という、東亜同文書院の立役者でもあります方の記念碑が哲学の道の入口のところにございますけれども、そちらをお参りしながら追悼式を近くの場所で行ないます。その2つの行事をこの度は企画いたしました。

集中豪雨も上がって今日から快晴になり、われわれとしても祇園と快晴という条件の中、何とか

オープンできてありがたく思っております。ということとただいまから始めさせていただきます。まず最初に本学の学長佐藤元彦のほうからご挨拶をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

**【佐藤】** こんにちは。愛知大学の佐藤でございます。本日は京都におきまして東亜同文書院大学に関わつての展示会ならびに、このあと講演会が開催されますけれども、このようにお集まりいただきまして誠にありがとうございます。今回は東亜同文書院大学だけではなくハルピン学院、さらに建国大学の関係者の皆様にお集まりいただいております。合わせてお礼を申し上げさせていただきます。

東亜同文書院大学記念センターが愛知大学に設立されたのは1993年であります。以後東亜同文書院、あるいは東亜同文書院大学に関する資料の収集、ならびに展示の整備を進めてまいりましたが、2006年からは文部科学省のほうから、オープン・リサーチ・センター整備事業として改めて補助金をいただく形になりました。以後今年に到るまで5年間をかけて整備を進め、合わせてこの期間に、日本の各地で本日より同じような講演会ならびに展示会の開催をしてきたところでございます。

横浜に始まり、東京、福岡、神戸、そして今回の京都ということとでございますが、このあとさらに本間先生ゆかりの地である米沢、これが8月の

終わりです。そして最後になりますけれども11月に入りますと、名古屋で同じような展示会あるいは講演会を予定しているところがございます。名古屋につきましては、松坂屋さんをお借りして行なうということがすでに決まっております。補助金は5年間ですので、実は今年度で終わりということになりますけれども、大学としてはまた別の形で東亜同文書院に関する資料の収集あるいは整備、講演会の開催、さらにはそういったものに基づいた大学教育の展開ということにさらに力を入れていきたいと思っておりますので、引き続きご理解、ご協力を賜ればと考えている次第でございます。

多くの方はもしかするとご存じかも知れませんが、この機会に少し愛知大学における、中国に関わった教育研究ということにつきまして、改めてご紹介をさせていただければというふうに考えております。先ほど申し上げましたように、東亜同文書院大学記念センターは1993年にスタートしております。それ以前に、たとえば国際問題研究所という場所において中国研究を進め、あるいは今年第3版が久方ぶりに刊行されました中日大辞典の編纂作業を進められるということがございました。教育という点でいきますと、そういった研究、辞書編纂をベースにしまして、1997年に現代中国学部というのが日本で初めて設置をされております。大学院の中国研究科というのはそれよりも少し前に遡りまして、1991年にスタートしております。

さて現代中国学部におきましては、3つの現地主義というのが教育の1つの大きな特色になっています。「三現地主義」あるいは「三現主義」という言い方をわれわれはしております。それは言ってみれば東亜同文書院大学自体の教育を髣髴とさせるといふふうに私自身は考えているところでございますけれども、まず1学年全員が、中国の南開大学で中国語のトレーニングを受ける。そういうプログラムに始まります。そして身に付け

た中国語を今度は実際の現地における調査という中で使っていく中国現地研究実習という科目が3年生、4年生に配置をされているところがございます。これにつきましては、約3週間の調査を中国で行ないまして、その調査の成果を履修者、参加者1人1人が5分間で中国語で発表するという機会が設けられております。これは毎年受け入れ先、提携先を変えて実施されてきておりまして、昨年は東北師範大学にお願いして受け入れをしていただきました。私自身はその前に浙江大学で実施された際、ちょうど10回目であるということでも成果発表会に顔を出させていただいたんですが、全員が中国語で発表し、それに対して受け入れ先の大学の学生さんが中国語で質問する。さらにその質問に対して愛大生が中国語で答える。このプロセスが実に見事であるというふうに、手前味噌でございますけれども受け止めております。そしてさらには3つめの現地主義になりますけれども、いわゆるインターンシップ、これにつきましても中国で展開しており、今年につきましては上海でさらに3つほどインターンシップ先が増えたという報告も受けているところでございます。

これが現代中国学部の教育の極めて特徴的な部分であります。大学院につきましては先ほど申し上げましたように、現代中国学部の設置よりも6年早くスタートしております。この特色は何と言ってもテレビ会議システムを使って、日本語を使わずに中国語と英語だけで授業を展開するところがございます。さらに言えばそういうプログラムを通して博士の二重学位、修士の二重学位、そういったものをこの間展開してきているという点でございます。残念ながら中国人の方のほうが多重学位を取得されてるケースは圧倒的に多いんですけれども、今後日本人についても、学位を2つ取得できるようなケースを何とか増やしていきたいというふうに思っているところであります。それから研究という点でいきますとこれも多くの方がご案内かも知れませんが、先

ほど申し上げました国際問題研究所であるとか、中日大辞典編纂所に加えて、国際中国学研究中心というのをごぞいまして、文部科学省の21世紀COEに採択され、今申し上げましたような、博士の二重学位のあとの、若手研究者の養成も含めて、この間担ってきてるところでございませぬ。

そうしたことがベースになりまして、実は今年外務省の日中研究交流支援事業に採択をされました。この日中研究交流支援事業と言いますのは、政治・外交、経済、それから3つ目が教育人材養成というふうに、大きく3つから構成されておまして、それぞれについて毎年1件ずつしか採択がされませぬ。その中で教育人材養成という点で愛知大学が採択をされたということでございまして、期間としては1年間という形で短いんですけども、過去の例を見ますと継続されているケースもございませぬので、何とか2年目、3年目が実現するように、大学としても努力をしていきたいと思っております。これは内容的には主に日中の交流の架け橋になるような人材、特に日本で学び中国に帰った人達を対象に、その後どういうふうにフォローアップをしていったらいいのかということについて考え、外務省に政策提言をするというのが最終的な目標になっております。これから9月、10月、12月と、日本、中国、日本という順番で国際シンポジウムを開催し、最終的には来年の2月までに研究成果をとりまとめて、外務省に政策提言を提出するという形になります。

このプロジェクトは愛知大学が申請をしたということではあるんですけども、内容的には一橋大学と連携をするということが含まれておまして、一橋大学と連携をして最終的な成果を取りまとめ、外務省に提出をするという形になっております。民主党政権になりましてから特に東アジアということが強調されるようになってきているかと思っております。最近採択された新成長戦略の中で日中韓ということがかなり強調されておまして、

その点で言えばそういうチャンスも捕まえながら、中国だけではなく韓国との交流にも重点を置き、愛知大学の特色をさらに伸ばしていきたいなと、そういうふうを考えているところでございませぬ。

だいぶ長くお話をいたしましたけれども、韓国との交流もさらに強化をし、そして日中韓の学術交流、あるいはその人材養成という点で、知名度をもっと高めていくような、そういう努力をしていきたいということをこの機会に申し上げまして、私からの挨拶に代えさせていただきたいと思っております。改めまして本日お集まりいただきまして誠にありがとうございました。

**【司会】** 続きまして霞山会理事の星さんをお願いいたします。戦前に東亜同文書院を含め幾つかの学校の経営母体である東亜同文会というのがございました。その東亜同文会の理事長が近衛篤磨公でございまして、その方の雅号が霞の山と書いて霞山。それが戦後霞山会となりました。現在そちらの理事でいらっしゃる星さんからご挨拶を。よろしく願いいたします。

**【星】** 佐藤学長からの立派なスピーチのあと、私からということなんですけれども、僭越でございませぬがご指名でございませぬので簡単にご挨拶したいと思います。どうも皆さん今日は暑いところを、講演会に参加していただきましてありがとうございました。パンフレットの一番下のほうに「共催／財団法人霞山会」となっておりますけれども、霞山会についてあまりご存じじゃない方もいらっしゃるかも知れませぬ。今ご紹介のありました東亜同文会が戦前にありまして、それが戦後解散され、有志の皆さん、もちろん東亜同文書院大学の卒業生の皆さんも含めて戦後に作りましたのが霞山会でございます。

現在私共の名誉会長が近衛通隆。篤磨さんのお孫さんでございませぬ。霞山会はどういうことを今



してるかと言いますと、あくまでもやっぱり東亜同文会の理念を継承して、人材育成ということもありますけども教育関係のいろんな事業を展開しております。あまり時間がありませんので簡単に言いますと、まず1つは中国からの留学生の受け入れです。奨学金を出すということですね。これはもう35年ぐらい続けて、一貫してやっています。中国全体から毎年5名。上海から毎年3名。その代わり日本からも派遣する。日本から派遣する学生は、中国の大学院に入って勉強する院生です。日本から行く普通の留学生との違いは、あくまでも中国との教育部との協定に基づいて実施されているので、奨学金は中国から出してもらえます。それと同時に霞山会の留学生であれば、一般の外国の留学生が入れないような資料館、図書館（中国では档案馆とうあんかんという言い方をしていますけれども）にも行ける、そういう身分証明書ももらって、1年間向こうで勉強するという制度、ということが1つです。

それから中国でも特に北京、上海の人達は、大学の先生、日本語を教えている先生を含めて何回も日本に来てるわけですが、新疆省とか四川省とか陝西省とか寧夏自治区とか、そういう内陸で日本語を教える先生方は、日本に来るチャンスが無いんです。そういう人に対しては全額霞山会が費用を負担して、日本に来てもらって各学校、大学を回ってもらったり、日本語研究所とかそういうところも回ってもらう。それと同時に新潟市の協力も得まして農家でホームステイしていただく。それで日本の農家の皆さんがどういう生活をしてるかということも含めて、一緒にホームステイをしながら理解していただく。もちろんディズニーランドとかの観光コースもそこへちょっとプラスしています。これはもうなかなか行けないところですから。いわゆる1回も日本に来ていない、中国で日本語を教えている中国人の日本語教師を呼んであげる。こういうことだと思いますね。これは非常に大事なことじゃないかと

思います。

もう1つ霞山会として今年から始めました新しい事業としては、東北地区、もと「満洲」でございますけれども、まだまだ貧困な家庭が多く、大学の統一試験（全国で一斉に試験をして、何点以上は北京大学に入れるとかいうのが決まってる）で点数が良くて受かったとしても、残念ながら授業料が払えない。だいたい授業料は各大学みんな、向こうは国公立しかないですけど1年間に5千元。日本円に直せば7万円ぐらいですけども、この奨学金を出していこうということで、東北地区の3大学と、日本語学校もありますので出しております。

ちょっと話が長くなりましてすみませんが、人材育成という面から言うと、こういう奨学金で相互交流という以外に、日本語学校と中国語学校をやっています。日本語学校は現在170名。全員中国大陸から来て日本語を学ぶ中国人を受け入れております。学校の名前は東亜学院日本語学校。170名のうち約60%が中国の大学を卒業し、日本に来て日本の大学院で学びたいという人間です。こういう人達が日本語ができない。大学や大学院で先生の講義を日本語で受けても分からない、理解できないという、そういう人達に日本語を勉強してもらうということで、毎年150名ぐらい卒業させてます。それから中国語学校。これは去年1年間で延べにして約1,500名ほど、日本人の企業の皆さん（政府、自治体の人達が多い）を受け入れて中国語を教えます。教え方としては、中国語学校というのはいっぱいありますけれども、その中でやっぱり企業の人達が多いものですから、たとえば銀行の人達だったら銀行の人達が使う専門用語、それから鉄鋼メーカーの企業の人達でしたら鉄鋼関係で使う専門用語も含めて、いわゆるビジネス中国語と言ってますけれども、そういうものも教えているということでございます。

以上宣伝になりまして申し訳ありません。私共

は一応民間という形になっておりますので、日中間が政治的、外交的に非常に悪化した時期でも、一貫して中国を主としたアジア諸国との交流を深めていっています。引き続きそういう分野での交流を深め、一番大事な相互の協力、理解ということに力を入れていきますので、皆さん方ももしご関心、興味がありましたら、東京の赤坂に事務所がありますので、どうか遠慮なく訪ねてきてください。中国語を勉強したいということであればそれでも結構です。歓迎いたします。

ちょっと長くなりましたけれどもこの辺で失礼いたします。ありがとうございました。

**【司会】** どうも星さんありがとうございました。星さんはハルピン生まれということで、しかも中国の方よりも中国語がお上手だということです。またご興味がございましたら霞山会をご最良にお願いしたいというふうに思います。

それでは早速ですけど、ただいまから講演会を開かせていただきます。メインテーマは「大陸にあった日本の高等教育機関と東亜同文書院」ということとあります。この趣旨はどういうことかと申しますと、愛知大学は東亜同文書院の教職員および学生諸君から引き揚げてできあがった学校でございます。メインはそういうこととございます

けれど、途中から、戦争直後、文部省のほうからの達しがございまして、それ以外の大陸から帰ってこられる方々も受け入れるということがございました。京城帝大とか台北帝大とか、今日のハルピン学院とか建国大学とか、その他諸々の旧制の高等学校の方々、こういう方々が予科へ入って、大学におられた方は学部に入るという形で愛知大学が設立された、そういう経緯がございまして。そういう意味で、愛知大学は文字通り東アジアの中に設立された学校という位置づけもできるわけとございます。

そこでそういうことも踏まえて、今日は東亜同文書院卒業生の小崎先生のお話も含めまして、あと佐藤先生（建国大学）、谷先生（ハルピン学院）のお2人をお招きいたしまして、少しご経験を交えて、このようなタイトルで本日の講演会を開かせていただきたいということとございます。また、この後ろのほうに2部屋分、展示コーナー、あるいはビデオの部屋を用意してございますので、お帰りの時にでもお立ち寄りいただければ大変ありがたいと思っております。本学は展示施設を持っておりまして、今回は会場の都合もありましてその中から資料をピックアップしてまいりましたけれども、またお立ち寄りいただければありがたいというふうに思っております。